

大学入試を追う

# 2024年度 入試結果速報

今春の18歳人口は前後5年で最少となる見込みだ。大学志願者数もこれに連動して減少したと推定する。一方で私立大のみならず、国公立大でも理工系を中心に入学定員増があり、大学入試の競争緩和が一層進行する環境にあった。

新課程入試を翌年に控える年は安全志向が強まるのがこれまでの動向であったが、今春は少し様相が異なった。国公立大の中期・後期まで積極的に出願する、私立大の出願校数を増やすなど、現役合格を望む志向は顕著だったものの、志望校を下げる動きはみられなかった。

学部系統の人気では、医や獣医など難関資格に関連する系統で人気を維持した。また、情報系では募集人員の増加が目立つ国公立大で志願者数が伸びず倍率は緩和した。

以下、今春の共通テストの概況と3月8日時点で判明している志願状況をレポートする。

## 2024年度入試の概観

### → 大学入試の環境

- 進む少子化と入学定員増
- 現行課程最後の入試
- 共通テスト受験者は減少、平均点はアップ

### → 国公立大の状況

- 志願者数は前年並みを維持
- 隔年現象が顕著

### → 私立大の状況

- 志願者数は共通テスト方式で増加
- 際立つ女子大の志願者減少

各大学の入試結果の最新情報は下記をご参照ください。  
河合塾の大学入試情報サイト Kei-Net  
大学検索システム  
<https://search.keinet.ne.jp/search/option/>



## Part 1

## 大学入学共通テスト概況

## 志願者数は32年ぶりに50万人を下回る

2024年度大学入学共通テスト（以下、共通テスト）は1月13・14日の2日間にわたり、全国668会場で実施された。

今年度の志願者数は491,914人（前年比96%）、受験者数は457,608人（同97%）となった<図表1>。今春の高校卒業者は前年から3%ほど減少した見込みで、共通テスト志願者数・受験者数の減少はこれにともなうものである。志願者数が50万人を下回るのは1992年度以来、32年ぶりのこととなる。

現卒別にみると、既卒生の志願者数は7万人を切った。2020年度と比較すると3割以上減少している。このため、現役生占有率は、2020年の81%から今年度は85%まで上昇しており、現役生中心の入試になっている。

3科目以下受験者減少  
私立大専願者の共通テスト離れ

<図表2>は受験科目数別の受験者数の推移である。主に国公立大志望者が受験する7科目以上は前年比

図表1 センター試験・共通テスト 志願者・受験者数推移

年度	志願者数 (前年比)	受験者数 (前年比)	受験率
2020	557,699 (97%)	527,072 (96%)	95%
2021	535,245 (96%)	484,114 (92%)	90%
2022	530,367 (99%)	488,384 (101%)	92%
2023	512,581 (97%)	474,051 (97%)	92%
2024	491,914 (96%)	457,608 (97%)	93%

## センター試験・共通テスト 現役・既卒別志願者数

年度	志願者数		占有率	
	現役生	既卒生	現役生	既卒生
2020	452,235	100,376	81%	18%
2021	449,795	81,007	84%	15%
2022	449,369	76,785	85%	14%
2023	436,873	71,642	85%	14%
2024	419,534	68,220	85%	14%

\*大学入試センター資料より ※受験率は受験者数/志願者数

99%とほぼ前年並みであった。一方、4～6科目の受験者数は、前年比94%、私立大専願者が中心となる3科目以下の受験者数は、同93%といずれも減少率は高くなった。

2024年度共通テストの受験者数は、最後のセンター試験であった2020年度と比べ、7科目以上で92%、4～6科目で83%、3科目以下で78%と少数科目での受験で減少が著しい。私立大専願者の共通テスト離れがうかがえる。

難易度は安定してきたが、  
問題分量は引き続き増加

4年目の実施となった今年の共通テストだが、従来の出題傾向から大きな変化はなかった。複数資料の提示、日常や学習場面での問題解決を題材とした出題、および教科固有の「思考力・判断力・表現力」をより深く問うというコンセプトは継続している。

日常生活を題材にした出題では、「数学I・数学A」で電柱の高さと影の長さの測量について考察する問題が出題された。「化学」では解熱鎮痛剤や抗生物質などの医薬品が題材となるなど、身近なトピックからの出題が随所でみられた。

また、本試験では初めて連動型問題が出題された。連動型問題は、最初の設問の解答により、次の設問の解答が変わる問題で、「世界史B」で出題された。なお、「国語」では今年も「実用的な文章」は出題されなかった。

一方、かねてより指摘されている問題分量である

図表2 共通テスト 受験科目数別の受験者数

受験科目数	受験者数		前年差 (24-23)	前年比 (24/23)
	23年度	24年度		
7科目以上	276,075	272,845	-3,230	99%
4～6科目	84,594	79,374	-5,220	94%
3科目以下	113,382	105,389	-7,993	93%
合計	474,051	457,608	-16,443	97%

\*大学入試センター資料より

※理科の基礎を付した科目は2科目で1科目とする

が、今年は「化学」で前年から7ページも増加した。7科目受験した場合の問題冊子のページ総数は、センター試験時と比べ、50~60ページ増、約3割増となっている。

## 科目別平均点の変化

### 「英語リーディング」で高得点層が減少

＜図表3-1＞は大学入試センターが公表した共通テストの主な科目の平均点の一覧である。「国語」「生物基礎」「生物」「地理B」などで平均点が上昇した。一方、「数学Ⅰ・数学A」「数学Ⅱ・数学B」「日本史B」「政治・経済」などで平均点がダウンした。英語ではリーディングで平均点がダウンしたものの、リスニングでアップしたことで、英語全体では前年並みの平均点となった。

＜図表3-2＞は河合塾が実施した自己採点集計

図表3-1 共通テスト 主要科目平均点(本試験)

教科・科目名		平均点		
		23年度	24年度	差
英語 リーディング		53.81	51.54	-2.3
英語 リスニング		62.35	67.24	+4.9
数学	数学Ⅰ・数学A	55.65	51.38	-4.3
	数学Ⅱ・数学B	61.48	57.74	-3.7
国語		105.74	116.50	+10.8
理科①	物理基礎	28.19	28.72	+0.5
	化学基礎	29.42	27.31	-2.1
	生物基礎	24.66	31.57	+6.9
	地学基礎	35.03	35.56	+0.5
理科②	物理	63.39	62.97	-0.4
	化学	54.01	54.77	+0.8
	生物	48.46	54.82	+6.4
	地学	49.85	56.62	+6.8
地歴	世界史B	58.43	60.28	+1.9
	日本史B	59.75	56.27	-3.5
	地理B	60.46	65.74	+5.3
公民	現代社会	59.46	55.94	-3.5
	倫理	59.02	56.44	-2.6
	政治・経済	50.96	44.35	-6.6
	倫理、政治・経済	60.59	61.26	+0.7

※大学入試センター資料より。2023年度の理科②は得点調整後のもの

「共通テストリサーチ」参加者の英語リーディングの得点分布である。本試験の平均点は-2.3点とややダウンした程度であったが、得点率8割以上の受験者は前年比69%と大きく減少した。過去最多ワード数であった前年からさらに文章量が増加したため、成績上位層であっても解くのに時間がかかったようである。加えて設問では現代文の小説で求められるような、登場人物の心情を推し量る問題などが出題され、高得点がとりにくい出題となった。

数学では、「数学Ⅰ・数学A」「数学Ⅱ・数学B」ともに平均点はダウンしたが、難問と思われる出題ではなかった。解き方の方針・問題設定の理解力が必要とされ、数学的な思考力を問うことに重点を置いた問題が出題された。

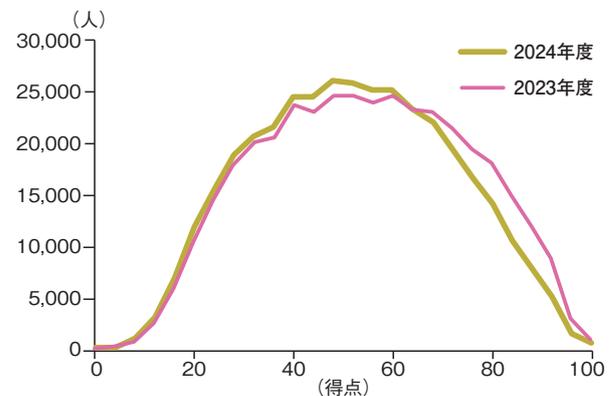
「国語」は漢文以外では複数文章の関連づけの負担が減った。読解自体に時間をとることができる出題となり、平均点は約10点アップした。

前年難化し、得点調整の対象となった「生物」だが、今年は易化した。考察問題の出題が減り、標準的な知識問題の割合が増加したことが要因とみる。

地歴では「日本史B」で平均点がダウン、「地理B」でアップした。複数の資料や会話文などから必要な情報を読み取り、知識と結びつけ総合的に判断する傾向は変わらなかった。公民は「倫理、政治・経済」を除く科目すべてで、平均点がダウンした。

共通テストは、2年前の数学難化や、前年の理科の得点調整など、当初は難易度の調整に苦心する様子がかがえた。本年度はしっかり対策してきた受験生にとっては、努力が実りやすい出題であった。

図表3-2 共通テスト 英語リーディングの得点分布



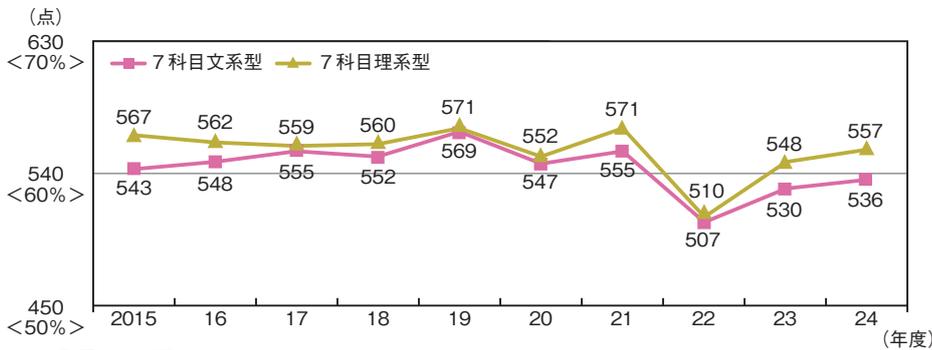
※河合塾実施の自己採点集計「共通テストリサーチ」より

### 7科目型平均点は文理ともにアップ

<図表4>は河合塾が推定するセンター試験・共通テストの7科目型平均点の10年間の推移である。

今年の平均点は7科目文系型(900点満点)が536点(前年差+6点)、7科目理系型(900点満点)が557点(前年差+9点)と、前年からややアップした。この2年の平均点は6割前後で落ち着いている。

図表4 センター試験・共通テスト 総合型平均点推移



※総合型平均点は河合塾推定

7科目文系型：英・数(2)・国・理(1)・地公(2) (900点満点)

7科目理系型：英・数(2)・国・理(2)・地公(1) (900点満点)

\*2020年度まではセンター試験の数値で、英語は筆記+リスニングの250点を200点に換算して集計

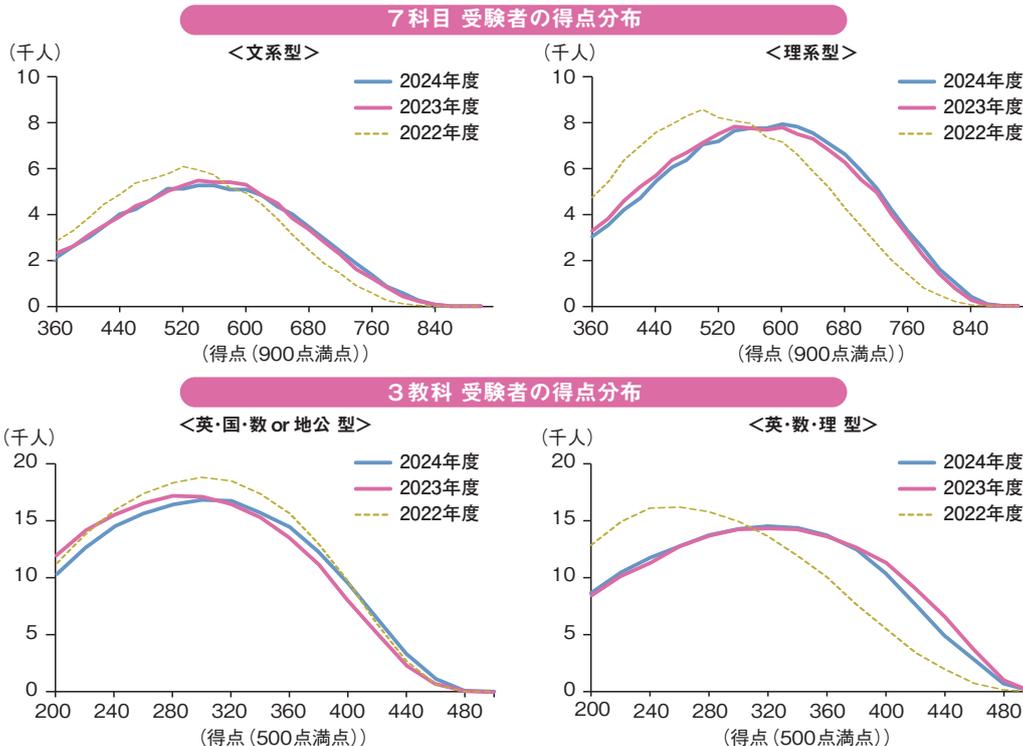
\*理科の基礎を付した科目は2科目で1科目とする

<図表5>は「共通テストリサーチ」参加者の得点分布である。多くの国公立大で必要となる7科目の受験者の得点分布は、文系型、理系型ともに得点率8割以上の受験生が前年から約1割増加した。英語リーディングや数学では高得点層が減少したが、国語をはじめとしたその他の科目で押し上げる形となった。

3教科型では、主に私立文系志望者が利用する「英・国・数または地公」の3教科型と、私立理系志望者が利用する「英・数・理」の3教科型の得点分布を示した。2つのグラフともに分布が2年連続で小さくなっているのが特徴だ。冒頭でお伝えしたように、私立大専願者の共通テスト利用が継続的に減少していることがわかる。

次年度はいよいよ新課程入試となる。新教科「情報」や平均点の変動などが大学入試にどのような影響を及ぼすのか注目していきたい。

図表5 共通テスト 7科目型、3教科型 受験者の得点分布



※河合塾実施の自己採点集計「共通テストリサーチ」より、2023年度は得点調整を反映させたデータで作成

Part 2

国公立大学の志願状況

前期・後期日程では  
前年並みの志願者数集まる

国公立大入試の中心となる前期日程の志願者数は、232,342人（前年比100%）となった<図表6>。共通テストの受験者数が前年比97%と減少したことと比較すれば、国公立大の人気は上昇したといえるだろう。国立大、公立大を分けてみても、国立大で前年比101%、公立大で同100%と大きな差はなかった。後期日程の志願者数も前年比100%だったが、公立大で

実施される中期日程では前年比98%とやや減少、志願倍率は0.1ポイントダウンした（以降、倍率は特に記載のない限りすべて志願倍率）。

新課程入試を翌年に控え、志望を下げる、科目負担が軽い私立大に出願校を絞り込むなどが予想されたが、そういった安全志向はみられなかった。要因には、ここ数年の入試の競争緩和に加え、共通テストの平均点が前年からややアップし、当初予定通りの出願がしやすかったことが挙げられるだろう。

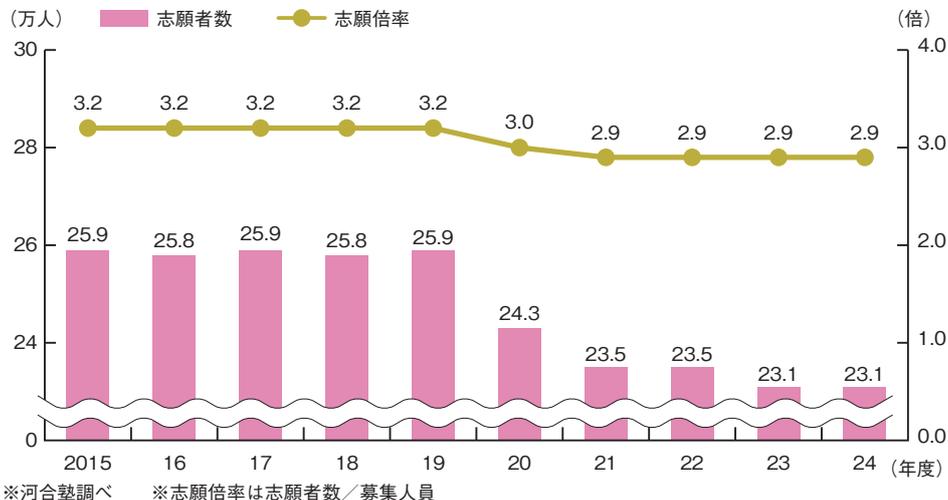
志願者数が前年と大きく変わらなかったことで、例

図表6 国公立大志願状況

区分	日程	志願者数					志願倍率		
		22年度	23年度	24年度	前年差 (24-23)	前年比 (24/23)	22年度	23年度	24年度
国立	前期	179,318	176,447	177,519	+1,072	101%	2.8	2.8	2.8
	後期	123,631	121,822	122,193	+371	100%	9.5	9.6	9.7
公立	前期	55,239	54,968	54,823	-145	100%	3.4	3.3	3.3
	後期	39,781	38,246	37,653	-593	98%	11.8	11.3	11.2
	中期	31,380	31,663	31,068	-595	98%	13.4	13.0	12.9
国公立計	前期	234,557	231,415	232,342	+927	100%	2.9	2.9	2.9
	後期	163,412	160,068	159,846	-222	100%	10.0	10.0	10.0
	中期	31,380	31,663	31,068	-595	98%	13.4	13.0	12.9

※河合塾調べ ※志願倍率は志願者数/募集人員  
※独自日程で実施する大学は上表には含まれていない

図表7 国公立大（前期日程）志願者数の推移



年以上に目立ったのが隔年現象である。前年志願者が減少していると、翌年は増加する動向がよくみられるが、その増減幅が大きい大学があった。前期日程で前年と今年で前年比が大きく変化した例は、北見工業大(53%→188%)、横浜国立大(136%→88%)、福井大(62%→133%)、鳥取大(85%→120%)、山口大(135%→72%)、香川大(67%→121%)などである(以降、特に記載がない場合、志願者数・前年比は前期日程を表す)。

＜図表7＞は過去10年間の志願者数・倍率の推移である。国公立大の志願者数は、2019年度までは26万人弱で推移してきた。受験人口減の影響で2020年度以降、志願者は減少しており、2023・2024年度の2年間は23万人前半で推移している。倍率もこの4年は2.9倍で推移しており、昨今で比較すれば変わらないものの、数年前と比較すれば競争緩和が進んでいる様子がわかる。

＜図表8＞は地区別の志願状況である。前年との変化が小さい地区が多いが、北関東、北陸、九州では増減幅がやや大きかった。

このうち北陸地区では前年比90%となった。能登半島地震の被害が大きい地域であることも要因の一つだろう。受験時の宿泊先の確保や入学後の住宅事情に不安が残るなか、他地区からは出願しにくかったとみ

る。ただし、志願者数は金沢大(前年比93%)、富山大(同75%)と必ずしも被災地に近い方の大学で減少率が高くなっているわけではなく、前年の反動や募集単位の変更の影響の方が大きい。

九州地区では地区全体で1千人を超える志願者増となった。なかでも北九州市立大(前年比129%)、長崎大(同126%)などで大きく増加した。長崎大で志願者が3千人を超えたのは2004年度以来となる。

## 学部系統別の志願状況

### 「文・人文」「理」「学際」系で志願者増

＜図表9＞は国公立大の前期日程の志願状況を、学部系統別に集計したものである。

文系では「文・人文」で志願者が増加、「社会・国際」「法・政治」でやや減となった。理系では「理」で志願者増加、「工」で前年並みとなった。「学際系(総合・環境・情報・人間)」は前年比108%と全系統のなかで増加率が最も高くなった。以下に、主な系統について確認していく。

#### 文・人文学系

前年比105%と文系の系統の中で志願者の増加率が最も高くなった。分野別にみると、新型コロナ流行以

図表8 国公立大(前期日程)地区別志願状況

地区	志願者数					志願倍率		
	22年度	23年度	24年度	前年差 (24-23)	前年比 (24/23)	22年度	23年度	24年度
北海道	11,559	11,231	11,203	-28	100%	2.8	2.7	2.6
東北	18,560	17,620	17,255	-365	98%	2.8	2.7	2.7
北関東	11,901	12,321	12,757	+436	104%	2.8	2.9	3.0
南関東	47,676	48,258	48,578	+320	101%	3.5	3.6	3.6
甲信越	10,793	10,545	10,491	-54	99%	2.7	2.6	2.6
東海	20,552	20,993	20,928	-65	100%	2.9	3.0	3.0
北陸	10,903	10,253	9,267	-986	90%	2.8	2.7	2.4
近畿	40,085	40,218	40,860	+642	102%	2.9	2.9	3.0
中国	19,759	21,042	20,426	-616	97%	2.6	2.8	2.6
四国	11,607	9,062	9,364	+302	103%	3.1	2.4	2.5
九州	31,162	29,872	31,213	+1,341	104%	2.7	2.6	2.7

※河合塾調べ ※志願倍率は志願者数/募集人員

※北関東：茨城・栃木・群馬 南関東：埼玉・千葉・東京・神奈川

降不人気となっていた「外国語」など国際系の分野で増加が目立った。ただし、志願者数自体は一昨年と比べてもまだ少なく、コロナ禍前に戻るのはまだ先となりそうだ。

社会科学系(社会・国際、法・政治、経済・経営・商)

「社会・国際」系の志願者数は前年比98%、5年連続の減少となった。ただし、分野により動向は異なり、「国際関係」分野では前年比105%と増加した。前年共通テスト数学の科目数増で志願者を大きく減らした東京外国語大(国際社会、国際日本)で前年比115%となったほか、千葉大(国際教養)、金沢大(人間社会-国際)、九州大(共創)などでも志願者が増加した。

「法・政治」系の志願者数は前年比97%とこちらも減少した。国立難関10大学グループでは前年比99%、その他の大学は同96%と、やや異なる動向をみせた。

大学別にみると、一橋大(法)、金沢大(人間社会-

法)、京都大(法)、神戸大(法)で志願者が前年から1割以上増加した。一方、北海道大(法)、東北大(法)、名古屋大(法)、大阪大(法)などでは志願者が減少した。

「経済・経営・商」学系では、志願者数は前年比101%となった。志願者数が大きく変動した大学をみると、横浜国立大(経済)前年比272%→61%、一橋大(商)同83%→116%、名古屋大(経済)同75%→119%、広島大(経済-昼)同137%→84%、山口大(経済)同142%→67%などとなった(前年比はいずれも23→24年度)。

教育学系(教員養成課程、総合科学課程)

教育学系全体の志願者数は前年比98%、教員養成課程で同99%、総合科学課程で同95%となった。教育学系の志願者数は年々減少しているが、ここ2年は小幅にとどまった。2年とも模試段階では不人気であったが、最終的には減少率は小さくなった。なお、今

図表9 国公立大(前期日程)学部系統別志願状況

系統	志願者数					志願倍率		
	22年度	23年度	24年度	前年差 (24-23)	前年比 (24/23)	22年度	23年度	24年度
文・人文	20,680	19,061	19,930	+869	105%	2.9	2.7	2.8
社会・国際	12,186	11,315	11,034	-281	98%	3.0	2.8	2.7
法・政治	12,054	11,971	11,608	-363	97%	2.9	2.9	2.8
経済・経営・商	24,384	25,478	25,700	+222	101%	3.0	3.1	3.1
教育-教員養成課程	16,695	16,467	16,241	-226	99%	2.4	2.3	2.3
教育-総合科学課程	2,006	2,102	1,991	-111	95%	2.4	2.5	2.3
理	14,098	14,159	14,601	+442	103%	2.8	2.8	2.9
工	64,085	61,322	61,347	+25	100%	2.8	2.7	2.7
農	15,893	16,175	15,819	-356	98%	2.9	3.0	2.9
医・歯・薬・保健	35,895	37,006	36,962	-44	100%	3.3	3.4	3.4
医	15,087	15,960	15,973	+13	100%	4.2	4.5	4.5
歯	1,576	1,769	1,879	+110	106%	3.5	3.9	4.2
薬	3,120	3,141	3,111	-30	99%	3.8	3.8	3.8
看護	10,647	10,281	10,322	+41	100%	2.7	2.6	2.6
医療技術・他	5,465	5,855	5,677	-178	97%	2.9	3.1	2.9
生活科学	2,410	2,349	2,345	-4	100%	3.0	3.0	3.0
芸術・スポーツ科学	6,848	6,881	7,048	+167	102%	4.4	4.4	4.5
総合・環境・情報・人間	7,323	7,129	7,716	+587	108%	3.2	2.9	2.9
国公立 計	234,557	231,415	232,342	+927	100%	2.9	2.9	2.9

※河合塾調べ ※志願倍率は志願者数/募集人員

春入試で倍率が2.0倍未満の募集区分は全系統で500区分にのぼるが、そのうち約4割を教員養成系が占めており、競争緩和が進む系統である。

### 自然科学系(理、工、農)

「理」学系では前年比103%と志願者が増加した。分野別では「数学・数理情報」「物理」分野などで志願者が増加した。主な大学の動向を確認すると、大阪大(理)、神戸大(理)では前年から1割以上志願者が増加した。一方、富山大(理)では志願者が半減した。今春1学科6プログラムに改組、学部一括募集となった。入試科目が異なる4パターンで募集したが、入学時に配属が未定の募集を受験生は避けたようである。

「工」学系では志願者数は前年比100%だった。分野別では「電気・電子」「応用化学」で志願者が増加した一方、「通信・情報」「生物工・生命工」などで減少した。「通信・情報」分野では入学定員が増加していることもあり、倍率は3.4→3.1倍にダウンした。

「農」学系では前年比98%、一昨年並みの志願者数に戻った。分野別では「酪農・畜産」(前年比114%)、「獣医」(同108%)で増加率が高くなった。「酪農・畜産」では鹿児島大(共同獣医)に畜産学科が新設された影響が大きい。なお、近隣の宮崎大(農畜産草地科学)では志願者が半減した。

### 医療系(医・歯・薬・保健)

医療系全体の志願者数は、前年比100%となった。「歯」では前年比106%と志願者が増加、「医」「薬」「看護」では前年並みとなった。

「医」では前年まで3年連続で志願者が増加しており、今春もその人気を保った形だ。また、国立難関10大学グループでの志願者は前年比105%と増加を続けている。動きの目立つ大学を挙げていくと、岐阜大では第1段階選抜の予告倍率を9→3倍に変更したため、志願者数は前年比34%と大きく減少した。ただし倍率は3倍を超えたため第1段階選抜が実施された。奈良県立医科大は2次の学科試験を小論文に変更した。対策の立てづらさが受験生に敬遠され、志願者数は57人(前年比25%)と大きく減少した。合格者数も12人(募集人員22名)とし、欠員補充2次募集を実施した。

「看護」も前年並みの志願者数になった。この分野も教育学系同様、競争緩和が進む。すでに過去数年倍率が2.0倍未満で推移している大学もみられる。

### 学際系(総合・環境・情報・人間)

「総合・環境・情報・人間」の志願者は前年比108%と増加した。「総合」分野では2020年度からの志願者前年比は149%→45%→143%→64%→124%と、隔年現象を繰り返している。

「情報」分野も前年比107%と志願者が集まった。ただし、倍率は3.0→2.7倍にダウンした。学部新設などにより募集人員の増加率(前年比117%)が上回るためである。新設2年目の一橋大(ソーシャル・データサイエンス)、和歌山大(社会インフォマティクス)では志願者が減少した。中期日程では、今春新設の下関市立大(データサイエンス)で42.4倍と高倍率となった。

## 難関国立大の状況

### 10大学中7大学で志願者増

＜図表10＞は旧帝大を中心とした難関10大学の志願状況を前期日程・後期日程でまとめたものである。難関10大学全体では、前期日程の志願者数は56,326人(前年比101%)となった。大学別にみると、東北大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、神戸大、九州大の7大学で志願者数が前年を上回った。以下、各大学の状況を個別にみていく。

### 北海道大学

前期日程の志願者数は前年比98%とやや減少した。総合入試文系、文、教育、法、歯学部で減少が目立った。教育学部では3年連続の志願者減となった。法学部と経済学部は2020年度から交互に志願者が増減しており、今春の経済学部は前年比105%と志願者が増加した。総合入試理系では工学部の入学定員増に伴い、募集人員が50名増(前年比105%)となったが、志願者は前年比102%にとどまった。

後期日程では、志願者が前年比95%となった。教育、法、工、農学部など前年志願者が増加していた学部で減少した。ただし、文学部は3年連続、理学部は

図表10 国立難関10大学の志願状況

大学名	前期日程					後期日程				
	22年度	23年度	24年度	前年差 (24-23)	前年比 (24/23)	22年度	23年度	24年度	前年差 (24-23)	前年比 (24/23)
北海道	5,409	5,284	5,196	-88	98%	4,107	4,524	4,286	-238	95%
東北	4,392	4,239	4,423	+184	104%	1,332	1,007	1,279	+272	127%
東京	9,507	9,306	9,432	+126	101%	—	—	—	—	—
東京工業	3,802	4,167	3,982	-185	96%	—	—	—	—	—
一橋	2,588	2,641	2,721	+80	103%	1,244	1,739	1,683	-56	97%
名古屋	4,339	4,258	4,359	+101	102%	38	76	90	+14	118%
京都	7,210	7,417	7,800	+383	105%	360	410	406	-4	99%
大阪	7,501	7,398	7,196	-202	97%	—	—	—	—	—
神戸	6,071	5,885	6,110	+225	104%	4,052	4,020	4,046	+26	101%
九州	5,143	5,067	5,107	+40	101%	2,549	2,218	2,433	+215	110%
難関10大学計	55,962	55,662	56,326	+664	101%	13,682	13,994	14,223	+229	102%
その他大学計	178,595	175,753	176,016	+263	100%	149,730	146,074	145,623	-451	100%

※河合塾調べ ※「その他大学計」は難関10大学を除いた国公立大計

4年連続の志願者増となった。

### 東北大学

前期日程の志願者数は前年比104%、3年ぶりの志願者増となった。大きく志願者を増やした学部・学科は経済（前年比117%）、工（同110%）、医-医（同122%）、薬（同116%）などである。工学部は入学定員増（前年比105%）以上の増加率となり、倍率は2.4→2.6倍に上昇した。医学科は第1段階選抜の予告倍率を3.0→3.5倍に変更したことも出願を後押ししたとみる。

後期日程は経済、理の2学部が実施するが、大学全体で志願者は前年比127%と大きく増加した。前年は前年比76%と大きく減少しており、その反動が大きく出た。

### 東京大学

大学全体の志願者数は前年比101%となった。文科類では、文科一類・二類で志願者減、三類で増加した。文科一類では2年連続の志願者減となった。なお、文科一類・二類では第1段階選抜は実施されなかった。この2科類とともに第1段階選抜が実施されなかったのは、2016年度以来8年ぶりとなる。

理科類では、理科一類で志願者が前年比109%と大きく増加した。一方、理科二類では志願者は減少、一昨年並みの志願者数となった。理科三類では志願者数は416人、3年連続で4百人を超えた。

### 東京工業大学

大学全体の志願者数は前年比96%と減少、物質理工学院を除く5学院で志願者が減少した。なかでも、情報理工学院で前年比75%と減少率が高くなった。情報理工学院では入学定員増により一般選抜の募集人員も増員されたため、倍率は9.9→5.7倍へ大きくダウンした。それでも全学院で最も高倍率であることに変わりなかった。

物質理工、生命理工、環境・社会理工の3学院では学校推薦型・総合型選抜の拡大で一般選抜の募集人員が縮小した。このため物質理工で2.5→3.3倍、生命理工で2.3→2.9倍、環境・社会理工で4.5→5.0倍といずれも倍率は上昇した。

### 一橋大学

前期日程の志願者数は前年比103%となった。法、商学部では前年から1割以上増加した。一方、社会、ソーシャル・データサイエンス学部では志願者が減少

した。新設2年目のソーシャル・データサイエンス学部では前年比62%と大きく減少した。

後期日程は経済、ソーシャル・データサイエンスの2学部で実施する。前年志願者が減少した経済学部では今春は前年比105%と増加した。ソーシャル・データサイエンス学部では志願者は前年比84%と減少したが、倍率は今年も20倍を超えた。

### 名古屋大学

前期日程の志願者数は前年比102%となった。学部別にみると、経済（前年比119%）、工（同107%）、医学部（同108%）で志願者が増加した。

倍率に目を向けると、文学部で1.8倍、工-エネルギー理工で1.8倍、農-生物環境科学で1.5倍と3区分で2.0倍未満となった。

後期日程は医学科のみ実施する。志願者は2年連続で増加した。旧帝大の医学科で唯一、後期日程を実施することから、高成績層が集まったことが推測される。

### 京都大学

前期日程の志願者数は105%、3年連続の増加となった。医、薬学部を除くすべての学部で志願者が増加したほか、経済、工、農、総合人間の4学部では2019年度以降で最大の志願者数となった。今春より工業化学科から名称変更する工学部理工化学科の志願者は、2割以上増加した。

法学部の特色入試は後期日程での実施は今年が最後となる。志願者は406人（前年比99%）と前年並みだった。例年、東京大、京都大の前期日程との併願者が大部分を占めており、来年、この層がどこに出願するのかが注目される。

### 大阪大学

大学全体の志願者数は前年比97%となった。学部別にみると、文系学部は外国語学部を除きいずれも減少した。外国語学部の志願者は前年比109%と大きく増加した。前年は倍率が2.0倍未満の区分が25区分中9区分あり、なかでもインドネシア語専攻は1.0倍となっていた。今春は2.0倍未満の区分は5区分に減った。

理系学部の志願者は理学部で増加、工学部は前年並み、基礎工学部で減少した。基礎工学部は極端な隔年現象を起こしており、直近3年の志願者前年比は82%→130%→75%で推移している。

医療系学部の志願者は医-医、歯学部で増加、医-保健、薬学部で減少した。医学科は前年志願者が減少しており、今春は一昨年並みの志願者数に戻った。歯学部は3年ぶりの志願者増となった。

### 神戸大学

前期日程の志願者数は前年比104%、3年ぶりに志願者が増加した。学部別にみると、文、法、経営、理、農、医学部などで志願者が増加した。文学部では隔年現象が顕著で、直近5年の志願者前年比は121%→70%→158%→67%→133%で推移している。

後期日程の志願者数は前年比101%となった。学部別にみると、工、農、医、国際人間科学部で志願者増となった一方、文、法、理、海洋政策科学部で志願者減となった。募集区分単位では前年の反動が目につき、理学部の生物学科（志願者前年比67%）、惑星学科（同62%）などが極端に減少した。

### 九州大学

前期日程の志願者数は前年比101%となった。学部別にみると、志願者が増加したのは文、教育、芸術工、農、共創学部などで、芸術工学部の未来構想デザインコースでは倍率が2.0→7.1倍に上昇した。一方、志願者が減少したのは法、経済、理、工、歯、薬学部などで、薬学部では臨床薬学科で志願者が約1割減少、倍率は3.3倍にダウンし、創薬科学科（2.4倍）との差は縮まった。

後期日程では、前年比110%と志願者が増加した。特に増加率が高いのは文学部（志願者数317人）で、過去10年で最多となった。また、農学部では2年連続で増加した。

Part 3

私立大学の志願状況

新課程入試を控え、出願校を増やす動き

私立大入試については、志願者数を調査した全国102大学の集計（3月8日時点）から検証する。この102大学の2023年度入試の志願者数の合計は私立大全体の志願者数の7割を超えており、今春入試の概観は現段階で十分につかめるものとする。

全国102大学の一般選抜の志願者数は、全体で前年比102%となった<図表11>。前述の通り、高卒者数全体は減少する見込みのため、受験生が積極的に私立大に出願したといえるだろう。<図表12>は過去10年間の私立大全体の志願者数の推移をみたものである。以前は増加を続けていた志願者であるが、2021年度入試で大幅に減少、以降も志願者数は減少基調となっていた。しかし、2024年度入試は翌年に新課程入試が控えており、浪人を回避したい受験生が例年より出願校数を増やしたものと考えられる。

方式別にみると一般方式の志願者数は前年比101%とおおむね前年並みとなった一方、共通テスト方式では同105%と増加した。共通テスト受験者のうち、3科目以下の少数科目受験者は前年比93%と私立大専願者の共通テスト離れがすすむ。共通テスト方式では<図表11>の難関大・有名大で約2万人、それ以外の大学でも約1万4千人増加しており、国公立大との併願者も含めて負担の軽い共通テスト方式の出願を厚くしたものとみる。

グループ別の志願者は堅調も、女子大の志願者減は続く

大学グループ別に志願状況を見ると、首都圏では「首都圏女子大学」など一部を除き、志願者数は増加した<図表11>。「早慶上理」グループでは共通テスト方式で前年比108%と志願者の増加が目立つが、こ

図表11 私立大 大学グループ別志願状況

学校区分	一般方式					共通テスト方式					合計					
	22年度	23年度	24年度	23/22	24/23	22年度	23年度	24年度	23/22	24/23	22年度	23年度	24年度	23/22	24/23	
102大学 計	1,548,732	1,512,230	1,525,508	98%	101%	777,411	770,518	805,321	99%	105%	2,326,143	2,282,748	2,330,829	98%	102%	
主な内訳	早慶上理	157,513	151,418	150,454	96%	99%	50,479	54,122	58,396	107%	108%	207,992	205,540	208,850	99%	102%
	MARCH	265,467	253,289	255,256	95%	101%	119,142	122,717	124,719	103%	102%	384,609	376,006	379,975	98%	101%
	成成明國武	63,134	62,598	68,434	99%	109%	30,397	29,031	31,212	96%	108%	93,531	91,629	99,646	98%	109%
	日東駒専	101,855	98,103	109,450	96%	112%	68,760	62,083	72,555	90%	117%	170,615	160,186	182,005	94%	114%
	首都圏理系大学	158,182	166,491	162,990	105%	98%	139,643	137,131	137,925	98%	101%	297,825	303,622	300,915	102%	99%
	首都圏女子大学	34,246	30,610	29,559	89%	97%	18,713	18,922	18,016	101%	95%	52,959	49,532	47,575	94%	96%
	関関同立	178,395	182,304	185,438	102%	102%	70,440	77,975	83,867	111%	108%	248,835	260,279	269,305	105%	103%
	産近甲龍	181,130	186,269	178,170	103%	96%	76,579	73,388	70,096	96%	96%	257,709	259,657	248,266	101%	96%
	北星学園・北海学園	6,532	5,701	5,596	87%	98%	3,122	2,601	2,615	83%	101%	9,654	8,302	8,211	86%	99%
	東北学院	8,910	9,116	8,685	102%	95%	4,100	3,611	3,518	88%	97%	13,010	12,727	12,203	98%	96%
	南山・愛知・中京・名城	67,800	64,191	67,394	95%	105%	41,895	40,099	39,050	96%	97%	109,695	104,290	106,444	95%	102%
	西南学院・福岡	40,074	41,422	41,277	103%	100%	20,793	18,591	18,839	89%	101%	60,867	60,013	60,116	99%	100%
	上記以外の大学	285,494	260,718	262,805	91%	101%	133,348	130,247	144,513	98%	111%	418,842	390,965	407,318	93%	104%

※数値は3/8現在、河合塾集計（2024年度の志願者数が未公表・確定前の方式は集計対象外）

※大学グループ 早慶上理：早稲田・慶應義塾・上智・東京理科 MARCH：明治・青山学院・立教・中央・法政

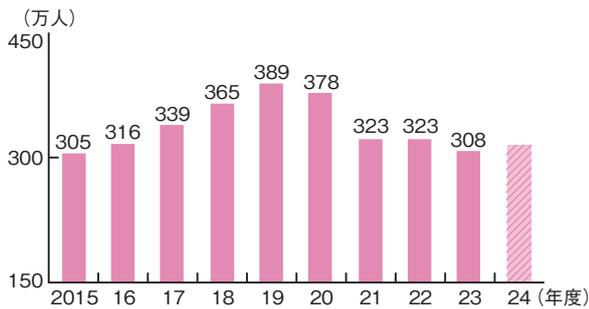
日東駒専：日本・東洋・駒澤・専修 成成明國武：成蹊・成城・明治学院・國學院・武蔵

首都圏理系大学：千葉工業・北里・工学院・芝浦工業・東京工科・東京電機・東京都市・東京農業・麻布・神奈川工科

首都圏女子大学：大妻女子・学習院女子・共立女子・実践女子・昭和女子・聖心女子・清泉女子・津田塾・東京女子

関関同立：関西・関西学院・同志社・立命館 産近甲龍：京都産業・近畿・甲南・龍谷

図表12 私立大 志願者数の推移



※文部科学省資料より

※グラフは私立大一般選抜志願者数の推移(2024年度は河合塾推定)

これは上智大の共通テスト方式の志願者が大幅に増加したことが要因である。とはいえ、東京理科大や早稲田大でも共通テスト方式で志願者の増加が目立った。「MARCH」グループの志願者数はおおむね前年並みであり、一般・共通テストの方式間の動向をみても、それぞれ大きな変化はなかった。なお、法政大は2年ぶりに、明治大では3年連続で志願者数が10万人を超えた。「成成明國武」グループの志願者数は前年比109%と大きく増加した。成蹊大、成城大、武蔵大では志願者数が1割以上増加した。なお、今春初の理系学部を新設した明治学院大では、前年度入試の反動もあり、大学全体の志願者数は前年並みにとどまった。「日東駒専」グループの志願者数は前年比114%となった。日本大は3月8日時点で志願者数を確定としていないため、集計に含んでいない。同大の志願者数は大幅に減少する見込みのため、最終的にはグループ全体で前年並みにとどまりそうだ。一方、「首都圏女子大学」グループの志願者数は前年比96%と志願者の減少が続いており、学部を新設する日本女子大も志願者は大学全体で1割以上減少した。

近畿圏をみると、「関関同立」グループの志願者数は前年比103%と、志願者の増加が続いている。今春も関西学院大を除く3大学で志願者が増加しており、特に関西学院大で大幅に志願者が増加した。なお、共通テスト方式の増加率が高くなっていることから、国公立大志望者が手厚く出願したものとする。「産近甲龍」グループでは龍谷大や近畿大の志願者は前年並みだったものの、京都産業大が志願者を大きく減らしたことでグループ全体の志願者数が前年比96%と減少した。なお、近畿大では、今春も14万人を超える志願者数となっており、11年連続で一般選抜の志願者数が日本

一となる見込みだ。

## 「文・人文」で志願者数回復、理系では「理」「医」で志願者増加

<図表13>は、学部系統別の志願状況である。

私立大全体の志願者数前年比102%を基準にみていくと、不人気が続いていた「文・人文」の志願者数は同103%と増加した。分野をみると、「外国語」分野の志願者が増加に転じた。一方、「心理」分野は前年比93%と減少した。「経済・経営・商」では前年比97%と減少した。分野で見ると、「商・会計・他」の志願者数の減少が目立った。

理系では「理」で志願者が増加した。なかでも「数学・数理情報」で大きく増加した。「工」の志願者数は前年比102%となった。新設・改組する学部が目立った「通信・情報」分野の志願者が大きく増加した一方、「建築」分野の志願者は微減となった。「農」の志願者数は前年比104%となり、模試の動向通りの結果となった。

医療系では、「医」で1割以上志願者が増加した。多くの大学が志願者増となっており、人気といえるだろう。一方、不人気が続く「看護」の志願者数は今春入試でも減少しており、人気の回復にはならなかった。

「総合・環境・情報・人間」は前年比101%となった。分野をみると、近年、学部・学科の新設が相次ぐ「情報」の志願者は前年比91%となった。「理」「工」の情報分野とは異なり、学際系の情報分野は人気とはいえない状況だ。

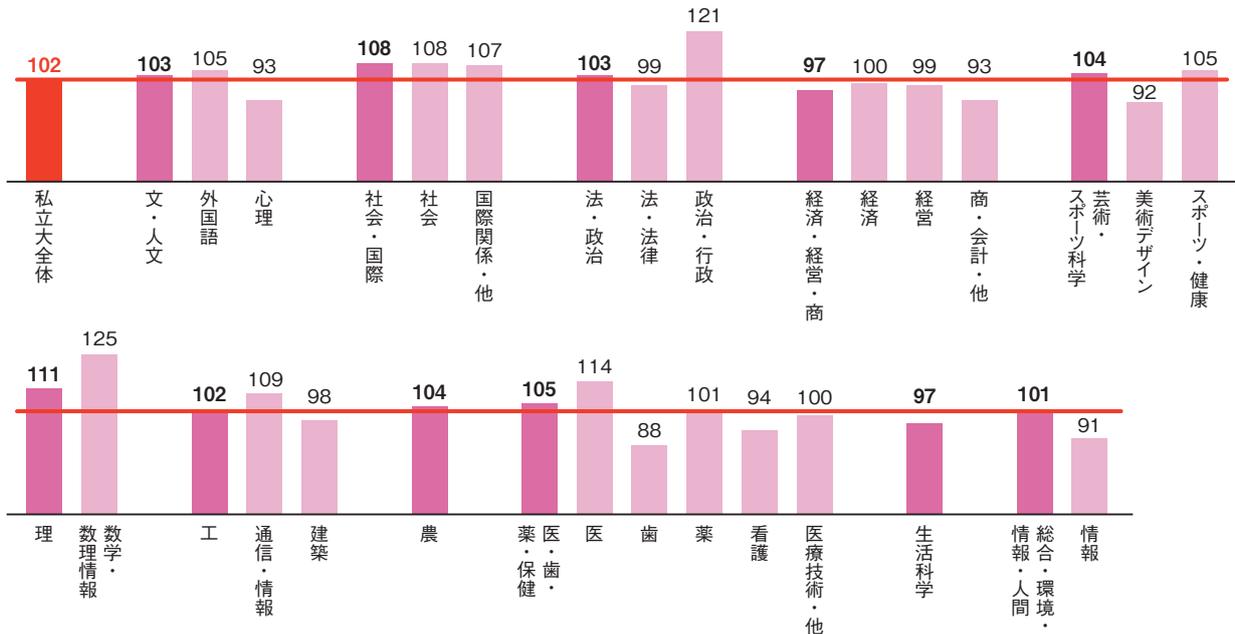
## 主な私立大の志願状況

<図表14>はいずれも、3月8日までに志願者数が判明した入試方式の集計である。以下、首都圏と近畿圏の13大学の状況について確認する。

### 青山学院大学

大学全体の志願者数は、47,109人(前年比107%)と増加した。前年入試では志願者が1割近く減少しており、その反動によるものとする。方式別では、一般方式の志願者は前年比115%と大幅に増加した一方、共通テスト方式は同100%と前年並みにとどまった。

図表13 私立大 学部系統別志願状況



※グラフ中の数値は志願者前年比(%)、グラフ内の横線は私立大全体の前年比102%のラインを示す  
 ※3/8現在、河合塾集計(2024年度の志願者数が未公表・確定前の方式は集計対象外)

学部別にみると、ほとんどの学部で志願者が増加した。特に前年度入試で志願者が2割以上減少した文学部(前年比126%)をはじめ、総合文化政策(同143%)、地球社会共生学部(同152%)では大幅に志願者が増加した。一方、国際政治経済(前年比95%)、理工(同85%)の2学部では志願者が減少した。理工学部では今春より、「個別学部日程B方式」で共通テストが不要となり、大学個別試験のみで合否判定を行う。同方式では前年並みの志願者を集めたものの、その他の方式では志願者が減少した。

慶應義塾大学

大学全体の志願者数は37,600人(前年比101%)とおおむね前年並みの志願者となった。学部別にみると、5学部で志願者が増加した。理工(前年比102%)、医学部(同105%)では3年連続で志願者が増加、志願者の減少が続いた文学部(同102%)なども増加に転じた。経済(前年比105%)、商学部(同105%)も志願者が増加したが、方式別にみると、数学を課すA方式の志願者は2学部とも1割近く増加したものの、英語・地歴・小論文を課すB方式はそれぞれ志願者が減少しており、方式間で動向に差が出た。一方、SFC(湘南藤沢キャンパス)にある総合政策、環境情報学部で志願者減が続いている。環境情報学部

では5年連続、総合政策学部では7年連続で志願者が減少しており、未だ志願者の回復の兆しはみえない。

上智大学

大学全体の志願者数は29,569人(前年比111%)と前年に続き、大きく増加した。前年度入試では志願者のほかに合格者数も3割近く増加、倍率はダウンしていた。狙い目とみた受験生が多く出願したものとみる。方式別にみると、一般方式(TEAPスコア利用方式)では志願者が101%、共通テスト方式では同114%となった。共通テスト方式の中でも、「共通テスト併用方式」に比べ、「共通テスト利用方式(3・4教科型)」の志願者の増加幅が大きくなった。

学部別の状況を見ると、外国語(前年比140%)、文(同120%)、法学部(同116%)などで志願者が大幅に増加した。一方で、総合人間科学(前年比95%)、理工学部(同94%)で志願者が減少した。なお、文学部と総合人間科学部の「共通テスト併用方式」は今春、大学独自試験の日程を2日間に分割した。これにより併願の選択肢が広がったが、総合人間科学部では志願者増につながらなかった。

中央大学

共通テスト後期を除く志願者数は、65,043人(前年

図表14 主要私立大 志願状況

大学名	一般方式				共通テスト方式				合計			
	22年度	23年度	24年度	24/23	22年度	23年度	24年度	24/23	22年度	23年度	24年度	24/23
北星学園	1,821	1,415	1,350	95%	876	533	491	92%	2,697	1,948	1,841	95%
北海学園	4,711	4,286	4,246	99%	2,246	2,068	2,124	103%	6,957	6,354	6,370	100%
東北学院	8,910	9,116	8,685	95%	4,100	3,611	3,518	97%	13,010	12,727	12,203	96%
千葉工業	52,824	57,307	52,667	92%	78,864	77,446	82,213	106%	131,688	134,753	134,880	100%
青山学院	24,614	21,850	25,068	115%	23,225	22,098	22,041	100%	47,839	43,948	47,109	107%
学習院	13,800	14,637	16,183	111%	2,821	3,457	4,062	118%	16,621	18,094	20,245	112%
学習院女子	1,143	1,425	2,486	174%	—	—	—	—	1,143	1,425	2,486	174%
北里	9,009	8,915	8,577	96%	2,787	2,847	2,843	100%	11,796	11,762	11,420	97%
共立女子	3,716	3,661	3,224	88%	766	1,116	1,086	97%	4,482	4,777	4,310	90%
慶應義塾	37,894	37,411	37,600	101%	—	—	—	—	37,894	37,411	37,600	101%
工学院	11,682	10,720	9,622	90%	8,827	9,075	7,973	88%	20,509	19,795	17,595	89%
國學院	14,868	15,390	15,810	103%	6,665	5,011	4,636	93%	21,533	20,401	20,446	100%
国際基督教	1,030	927	936	101%	—	—	—	—	1,030	927	936	101%
国士舘	8,192	7,202	6,843	95%	4,927	2,991	4,183	140%	13,119	10,193	11,026	108%
駒澤	19,515	19,507	19,715	101%	9,686	11,177	11,178	100%	29,201	30,684	30,893	101%
実践女子	1,916	1,913	1,902	99%	1,067	1,310	1,291	99%	2,983	3,223	3,193	99%
芝浦工業	22,182	21,603	23,233	108%	15,684	15,084	12,151	81%	37,866	36,687	35,384	96%
上智	5,123	4,915	4,966	101%	17,380	21,637	24,603	114%	22,503	26,552	29,569	111%
昭和女子	6,834	6,064	5,071	84%	2,774	3,826	3,159	83%	9,608	9,890	8,230	83%
成蹊	12,706	11,543	12,692	110%	6,769	6,902	8,789	127%	19,475	18,445	21,481	116%
成城	8,438	8,877	9,370	106%	6,891	5,176	6,800	131%	15,329	14,053	16,170	115%
専修	28,257	27,531	31,670	115%	15,311	15,084	16,837	112%	43,568	42,615	48,507	114%
中央	44,842	47,577	44,708	94%	18,513	19,180	20,335	106%	63,355	66,757	65,043	97%
津田塾	1,735	1,575	1,361	86%	2,245	2,153	2,568	119%	3,980	3,728	3,929	105%
東京工科	8,959	8,950	6,933	77%	4,073	4,038	4,320	107%	13,032	12,988	11,253	87%
東京女子	5,098	4,109	4,029	98%	3,228	2,921	2,847	97%	8,326	7,030	6,876	98%
東京電機	19,319	24,586	25,885	105%	8,196	7,835	8,736	111%	27,515	32,421	34,621	107%
東京都市	14,305	15,040	16,523	110%	8,881	9,507	9,708	102%	23,186	24,547	26,231	107%
東京農業	14,349	14,373	14,862	103%	7,545	7,050	6,660	94%	21,894	21,423	21,522	100%
東京理科	35,449	34,547	35,073	102%	18,303	16,151	17,188	106%	53,752	50,698	52,261	103%
東洋	54,083	51,065	58,065	114%	43,763	35,822	44,540	124%	97,846	86,887	102,605	118%
日本女子	6,248	5,783	5,145	89%	3,800	3,919	3,094	79%	10,048	9,702	8,239	85%
法政	79,537	68,962	70,667	102%	28,806	30,089	31,502	105%	108,343	99,051	102,169	103%
武蔵	12,722	12,055	14,328	119%	4,843	3,936	4,166	106%	17,565	15,991	18,494	116%
明治	76,328	80,258	80,589	100%	26,098	27,784	28,570	103%	102,426	108,042	109,159	101%
明治学院	14,400	14,733	16,234	110%	5,229	8,006	6,821	85%	19,629	22,739	23,055	101%
立教	40,146	34,642	34,224	99%	22,500	23,566	22,271	95%	62,646	58,208	56,495	97%
早稲田	79,047	74,545	72,815	98%	14,796	16,334	16,605	102%	93,843	90,879	89,420	98%
愛知	13,989	13,736	13,509	98%	5,656	5,317	5,620	106%	19,645	19,053	19,129	100%
中京	15,150	13,510	12,632	94%	11,960	10,760	10,200	95%	27,110	24,270	22,832	94%
南山	15,468	14,643	13,948	95%	7,976	7,605	7,886	104%	23,444	22,248	21,834	98%
名城	23,193	22,302	27,305	122%	16,303	16,417	15,344	93%	39,496	38,719	42,649	110%
京都産業	23,661	23,593	20,185	86%	11,851	12,642	8,666	69%	35,512	36,235	28,851	80%
同志社	37,726	40,157	40,731	101%	8,128	9,815	10,243	104%	45,854	49,972	50,974	102%
立命館	57,455	58,187	59,412	102%	30,880	33,195	36,367	110%	88,335	91,382	95,779	105%
龍谷	33,267	38,168	36,856	97%	18,925	18,330	19,148	104%	52,192	56,498	56,004	99%
関西	57,446	55,237	52,098	94%	19,987	21,093	19,357	92%	77,433	76,330	71,455	94%
近畿	115,595	113,126	108,250	96%	40,509	37,749	37,415	99%	156,104	150,875	145,665	97%
関西学院	25,768	28,723	33,197	116%	11,445	13,872	17,900	129%	37,213	42,595	51,097	120%
甲南	8,607	11,382	12,879	113%	5,294	4,667	4,867	104%	13,901	16,049	17,746	111%
松山	4,406	3,661	3,148	86%	1,727	1,455	1,898	130%	6,133	5,116	5,046	99%
西南学院	11,040	13,510	13,276	98%	6,138	5,658	5,720	101%	17,178	19,168	18,996	99%
福岡	29,034	27,912	28,001	100%	14,655	12,933	13,119	101%	43,689	40,845	41,120	101%

※数値は3/8現在、河合塾集計（2024年度の志願者数が未公表・確定前の方式は集計対象外）

比97%)となった。方式別でみると、一般方式の志願者数が前年比94%と減少した。前年度入試では志願者が増加しており、その反動とみる。一方、共通テスト方式は前年比106%と増加した。同方式の中でも、出願締切日が共通テスト試験日より前に設定されている「単独方式」(法-5教科型は除く)の増加がやや目立った。

学部別の志願者数をみると、例年多くの志願者数が集まる文(前年比87%)、経済学部(同89%)などで減少が目立った一方、国際経営(前年比122%)、総合政策(同108%)、法学部(同107%)などでは志願者が増加した。法学部は前年、23区内にある茗荷谷キャンパスに移転したこともあり、2年連続の志願者増となった。

#### 東京理科大学

大学全体の志願者数は、52,261人(前年比103%)と増加した。方式別では、共通テスト方式で前年比106%と増加率の高さが目立っており、特にC方式(共通テスト併用・事後出願)で志願者が増加した。C方式で利用する共通テストの教科は英語・国語の2教科のみであり、国語で平均点が大きく上がったことで出願がしやすかったことに加え、前年度入試で志願者が減少した反動などが志願者増の要因だろう。

学部別の動向をみると、薬学部では志願者数が前年比106%と増加した。2025年度には現在の野田キャンパス(千葉県野田市)から葛飾キャンパス(東京都葛飾区)への移転が予定されていることも志願者増の一因とみる。このほか、名称変更して2年目を迎えた創域理工学部の志願者数は前年比105%と増加した。

#### 法政大学

大学全体の志願者数は、102,169人(前年比103%)と増加した。青山学院大と同様、前年入試の反動により志願者数が増加した。方式別にみると、一般方式が前年比102%、共通テスト方式が同105%となった。

学部別にみると、文学部では前年比101%と今春は僅かな増加ではあるが、3年連続で志願者増となった。このほか多くの学部で志願者が増加したものの、理工(前年比95%)、デザイン工(同94%)、情報科学部(同89%)といった理系学部は志願者の減少が

続く。これらの学部の共通テスト方式は、共通テスト5教科で合否判定する「C方式」で志願者が増加したものの、3教科で判定する「B方式」では志願者が減少した。

#### 明治大学

大学全体の志願者数は、109,159人(前年比101%)とおおむね前年並みの志願者数となった。前年度入試では志願者が増加しており、人気を維持しているといえる。方式別では、一般方式で前年比100%、共通テスト方式で同103%と共通テスト方式で志願者が増加した。

学部別にみると、農(前年比112%)、情報コミュニケーション(同107%)、文学部(同105%)などで志願者が増加した一方、総合数理(同90%)、経営(同93%)、国際日本(同95%)、法学部(同95%)で減少した。志願者が減少した学部のうち、国際日本学部は前年に続き志願者減となった。また、法学部では今春、「学部別入試」の募集人員を減員し、「指定校推薦入試」を増員した。法学部の「学部別入試」の志願者数は減少したが、一般方式の他の区分も志願者が減少しており、募集人員減の影響は限定的であった。

#### 立教大学

大学全体の志願者数は、56,495人(前年比97%)と3年連続で志願者が減少した。方式別では、前年度入試で志願者が1割以上減少した一般方式では前年比99%と志願者数は回復しなかった。共通テスト方式は前年比95%と減少、志願者数が前年並みから増加となった「MARCH」グループの他大と異なる動向となった。

学部別にみると、文(前年比104%)、現代心理(同106%)、法学部(同121%)などで志願者が増加した。特に法学部は前年度、半数近く志願者が減少しており、その反動とみる。また、今春より入学定員を増員する異文化コミュニケーション学部では志願者が前年比91%と1割近く減少した。新設2年目のスポーツウエルネス学部は前年比102%と前年の志願者数を維持した。

#### 早稲田大学

大学全体の志願者数は89,420人(前年比98%)と

やや減少した。方式別では一般方式で前年比98%、共通テスト方式で同102%と共通テスト方式で志願者がやや増加した。

学部別にみると、教育（前年比94%）、文化構想学部（同93%）などで志願者の減少が目立った。教育学部では一般方式（A・B方式）では減少したものの、導入して2年目となる共通テスト方式（C・D方式）では志願者が増加した。法、政治経済学部でも全体の志願者は減少したものの、法学部では共通テスト方式で1割以上志願者が増加、政治経済学部では共通テストのみ利用する方式でおおむね前年並みを維持した。いずれの方式も共通テストの科目が6科目以上必要であるが、敬遠されることはなかった。

志願者が増加した学部をみると、スポーツ科学部では前年比112%と大きく増加した。理工3学部では創造理工、先進理工の2学部で志願者が増加した。前年度入試で人気を集め、実質倍率が3学部の中で最も高くなった基幹理工学部が避けられる形となった。

#### 同志社大学

大学全体の志願者数は50,974人（前年比102%）となった。方式別にみると、一般方式が前年比101%、共通テスト方式が同104%となった。

特徴のある動きをしている学部をみると、近年不人気が続いていた政策学部の志願者数が前年比159%と大きく増加した。グローバル地域文化、商学部などでは前年度入試で志願者が増加した反動もあり、志願者が減少した。一方、文化情報学部では前年度入試で志願者が大幅に増加したが、今春の志願者数も前年比119%と人気の高まりは続いている。

#### 立命館大学

大学全体の志願者数は、95,779人（前年比105%）と増加した。方式別でみると、一般方式では前年比102%、共通テスト方式では同110%となった。

学部別にみると、政策科学部では前年度入試の反動により志願者数が前年比136%と大きく増加した。このほか、産業社会（前年比118%）、経営（同118%）、情報理工（同117%）、映像学部（同111%）などで志願者が増加した。このうち情報理工学部と映像学部は今春、大阪いばらきキャンパス（大阪府茨木

市）に移転する。キャンパス移転が志願者増加をもたらした。一方、法（前年比85%）、スポーツ健康科学部（同92%）などでは志願者が減少した。

#### 関西大学

後期入試を除く大学全体の志願者数は、71,455人（前年比94%）となった。「関関同立」グループの中では唯一志願者が減少した。方式別でみると、一般方式で前年比94%、共通テスト方式は同92%となった。

学部別にみると、法学部の志願者数が前年比67%と大きく減少、特に一般方式で志願者の減少が目立った。法学部の一般方式は前年度入試で合格者数を大幅に減らし、実質倍率（受験者数÷合格者数）が3.7倍から6.2倍にまで上昇した。難化を警戒した受験生が出願を避けたものとみる。一方、環境都市工（前年比123%）、社会学部（同119%）などは志願者が増加した。特に環境都市工学部では共通テスト方式で志願者が大幅に増加したが、同方式は今春より既存の1方式を廃止し、新たに3方式を導入したことで出願数を増やした。

#### 関西学院大学

共通テスト3月出願を除く大学全体の志願者数は、大学全体で51,097人（前年比120%）と大きく増加した。近年、入試方式の拡大により志願者の増加が続いているが、それに伴い合格者数も増加、受験生が警戒せずに出願したものとみる。方式別にみると、一般方式では前年比116%、共通テスト方式では同129%となった。

学部別にみると、総合政策学部を除き志願者が増加した。特に文系学部を中心に志願者の増加が目立つ。同大の一般方式ではこれまで、理系の一部方式を除き、同一日に出願できる試験の型・方式は1つのみに限られ、併願ができなかった。しかし、今春より文系学部を含む全学部で「併願減額制度」を導入した。これにより一部の入試方式同士であれば併願が可能になり、併願時の検定料も減額された。さらに今春より文系学部の「学部個別日程」では傾斜配点型、均等配点型の2方式で実施しており、受験生にとって出願、併願しやすい環境が整っていた。